設楽発掘通信

No.81
令和５年
８月号

万瀬遺跡地元説明会を開催しました

残暑お見舞い申し上げます。暦の上では早くも立秋を過ぎましたが、秋とは名ばかりの暑い日が続いております。皆さまにはいかがお過ごしでしょうか。

七月から調査を続けております万瀬遺跡では、八月十一日（金）に地元説明会を開催させていただきました。私たちが行き来していた道路の下から見つかった人の生活跡（遺構）の実際の状況や、中世～近世の土器や古銭、さらには今から約一万年前の縄文時代早期に使われていた土器など、出土した遺物をご覧いただきました。遺構や遺物の実物をまじかに見て、当時の万瀬地区で暮らしていた人たちの生活の様子をリアルに感じていただけたことと思います。説明会の当日にお越しいただきましたこと、厚くお礼申し上げます。

さて、現在発掘調査中の万瀬遺跡よりも先に調査が終了しました上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査成果についてはWeb説明会を予定しております。詳しくは愛知県埋蔵文化財センターの下記URLにアクセスしていただければと思います。

万瀬遺跡の発掘調査は大詰めを迎えております。その後は下延坂遺跡、さらには根道外遺跡へと調査を進めて参ります。八月、九月は台風の多い月でもあり、急に気温が変化する場合もございます。皆様、お体をご自愛下さい。（鬼頭　剛）

図１　万瀬遺跡地元説明会の様子

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 Web 説明会のご案内

開催期間：2023年８月21日（月）から10月２日（月）まで
内容：上ヲロウ・下ヲロウ遺跡2023年調査成果（遺構・出土遺物）を映像でご紹介します。
会場：愛知県埋蔵文化財センター　ホームページ内

会場へは、愛知県埋蔵文化財センターHPトップ画面右側ボタン「あいち埋文チャンネル」をクリック、あるいは右下のQRコードからアクセスして下さい。

web説明会

下記のアドレスを直接入力して頂いてもアクセスできます。
あいち埋文チャンネル【 https://onl.tw/WS9dzPM 】

万瀬遺跡の発掘調査

今年で三度目となる万瀬遺跡の発掘調査が七月中旬から始まりました。今年度の調査区（23区）は遺跡範囲の東部、県道四三二号小松田口線にあたります。ここは二〇一九年度の調査区（19A区と19C区）と接しており、まずは上面で中世から近世にかけての遺構群、さらに下面で縄文時代早期の集落跡の調査が予定されています。今回は主に上面の調査について報告します（図2）。

本年度の調査では、掘立柱建物群によって構成されていた、かつての万瀬集落の南東端の様相が明らかとなりました。北側19C区の掘立柱建物群により近い23区西側では、柱穴群がまとまって見つかっています。これらは列状に展開するようで、土留めあるいは路に沿って設けられた柵列であったと考えられます。一方、23区東側は近世の耕作土が広がっており、耕作土を除去をすると、平坦面を二段確認することができました。

東南端の平坦面上では、二つの遺構（3074SK・3085SK）から、鉄滓が出土しました。鉄滓とは鉱石から鉄を精錬した際に残る不純物のことを指します。鉄滓は当時の鉄器生産技術を明らかにすることができる貴重な遺物で、自然科学的手法による解析も期待されます。また、同じ平坦面上からは、焼土を多く含む遺構のほか、地床炉のような遺構も見つかっています。このように23区東側は、近世の後半は耕作地であったようですが、それ以前は、野鍛冶などを行った作業場であった可能性も考えられます。

23区の西端では近世の墓坑（3018SZ）が確認されました。墓坑の中からは、人骨片、歯、小玉、鉄製品、繊維、寛永通宝、煙管等、多数の遺物が出土しました。寛永通宝や煙管は近世のお墓で副葬品としてよく見られます。小玉は中心部に穴が空いており、複数個出土していることから数珠であるかもしれません。

今回、中世から近世にかけての遺構を中心に調査をしてきましたが、調査区の南端で縄文時代の岩偶岩版類が一点出土しました。これは恐らく、中世から近世の造成等により縄文時代の堆積層から掘り起こされたものと考えられます。岩偶岩版類は設楽地域内の遺跡では、度々確認されています。

次号では縄文時代早期を中心とする集落跡の調査成果について、ご報告できたらと思います。

（荒木徳人）

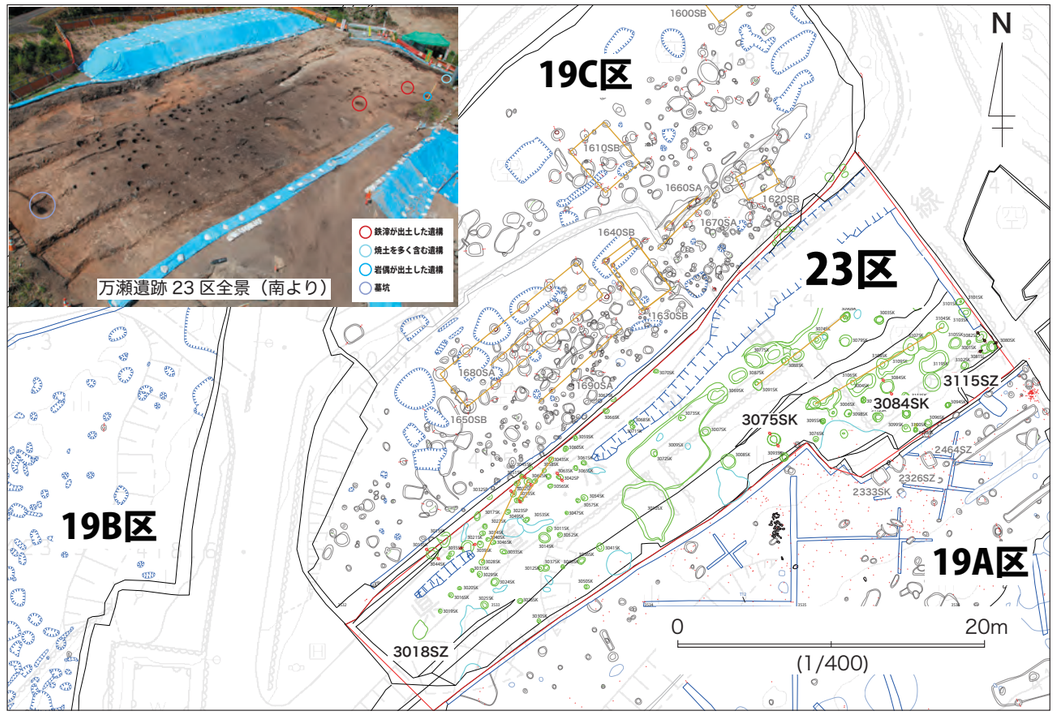

図2　万瀬遺跡 23 区【中世前半～近世中心】

注目される出土遺物ついて

二頁目に今年度の万瀬遺跡の調査概要をお伝えしましたが、ここではその中でも、特筆すべき成果について、もう少し詳細にお伝えします。

二頁目で墓坑とした遺構【3018SZ】は、見つかった時の大きさで、長軸110センチ、短軸90センチほどの、正方形に近い形でした。遺構底面までは深さ15センチ程度しか残存していませんでしたが、多数の副葬品とともに、状態は良くありませんが人骨の出土も確認できています。まだ不確かではありますが、江戸時代でも後半のものではないかと思われます（図3）。

今回、特に注目すべきものに小玉があります。径2～3ミリ程度の大きさで円盤状と、大きさと形がそろっています。遺構内では、埋土の上の方からも下の方からも出土していますが、平面的な位置でいいますと、遺構の中央付近からまとまって出土しているようです（図4）。現在、十点以上を確認しており、今後、取り上げた埋土を詳細に選別すると、もっと多くの小玉が見つかる可能性があります。素材は白濁したガラス製である可能性があり、まさに数珠つなぎの状態で使用・埋納されたものと考えられます。しかし大きさが小さいなど、現在一般的に知られている数珠とは様子が異なるところもあるようです。

次に、新たに出土した岩偶岩版類についてお知らせします（図5）。

大きさは、長さ4・3センチ、幅2・7センチ、厚さ2・2センチ、重さは33・4グラムで、砂岩でできています。厚みがあり、断面の形が扁平ではなく円形に近いことが大きな特徴です。全面が丁寧に研磨されており、詳細に見ると細かい面が形成されています。全体を見ると卵形で、身部の中央に深く溝が一条巡る形となっています。加工はそれのみでなく、さらに細い線刻も施されています。大きく弧線で囲んだ空間に、六条の横線で刻まれている意匠が認められ、こちらの面が正面と考えられます。これは顔面もしくは胸部や腹部などの上半身を表現していると思われますが、他遺跡出土事例との比較から後者の可能性があります。また反対側の面にも平行して二条の線刻が施されています。

設楽町内では、これまで多くの岩偶岩版類が出土しており、これまでも「設楽発掘通信」で何度かご紹介してきました。岩偶岩版類は石製の人形（ひとがた）で、女性を表現しているとされています。しかし断面が円形を呈する資料は男性を象徴した石棒との関連性も指摘されており、同様な例は設楽町内では笹平遺跡で見つかっています。このような事例は、後期後葉から晩期にかけて出現することから、本事例もこの時期に属する可能性が考えられます。（川添和暁）

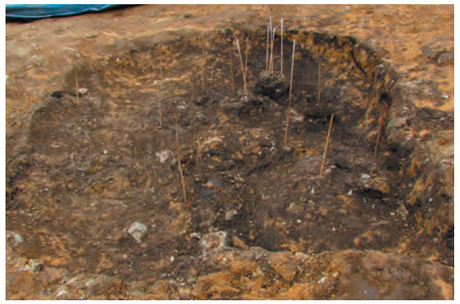

図3　墓坑 3018SZ 遺物出土状況（東より）
【 白クシは小玉の出土位置を示す 】

図4　3018SZ 内の小玉出土状況

図5　万瀬遺跡出土岩偶岩版類（上は出土状況）

田口鉱山について

設楽ダム関連の添沢遺跡から、真っ黒な石が見つかりました。漆を塗ったような滑らかな黒色がついている岩石です。よく観察すると、漆などが付着しているのではなく、風化面が黒くなっていました。また擦り傷や加工の痕跡が認められないので、自然石という判断をしました。後になり、その石はマンガン鉱石だったのでは？と思い立ちました。それは、田口鉱山というマンガン鉱山が存在したことによります。

田口鉱山は、『設楽町史 通史編』（二〇〇五）によると昭和二一年には存在しており、マンガンを採取していたようです。当時の国内では、マンガンは乾電池やマッチ、製鉄や製銅に利用されていました。田口鉱山の産出量を、通商産業省（現在の経済産業省）による統計資料である『本邦鉱業の趨勢』で、三年分が確認できました（表1）。これを見ると昭和二四年に二千トン以上あった産出量が、昭和二六年には六一五トンと減少していったことがわかります。「本邦鉱業の趨勢」によると、昭和二七年ごろから輸入鉱石が入ってくるようになったためとされています。また別の資料からは、「田口鉱山は一九六〇年までに一万八千トンの鉱石を出鉱した」という記載も発見しました。

では田口鉱山からは、どの様なマンガン鉱石が採取できたのでしょうか？地質調査の論文を調べてみると、菱マンガン鉱・パイロクロアイト・テフロ石・パイロクスマンガン石・バラ輝石（図6）などが記載されています。これらはすべてマンガンを含んだ鉱物です。マンガンを含んだ鉱物の多くは、ピンク色を呈するものが多いです。ですが、マンガンを含んだ鉱物を含む岩石は、風雨にさらされると表面が真っ黒な石ころとなっていることが多いのです。そこで、それと思しき真っ黒な石をハンマーで割ると、中はピンク！ということになり、なかなか楽しい体験ができます。

マンガン鉱山であること以外でも、田口鉱山は有名です。それは、「吉村石」という鉱物が、日本で二例目に発見されたことによります。吉村石が初めて確認されたのは、岩手県野田玉川鉱山で一九五三年のことでした。（学会発表は一九六一年です）。田口鉱山では、一九五八年には発見されていたようです。これを一九六三年までに鉱物学的な分析等を実施して吉村石であることを特定して論文発表となりました（広瀬文利・磯野清「愛知県田口鉱山産の吉村石について」『鉱物学雑誌』第六巻第四号）。

現在、田口鉱山は閉鎖されており、立ち入りはできません。田口鉱山で産出された鉱物をご覧になりたいと思われた方は、ぜひ奥三河郷土館におでかけください。奥三河郷土館の常設展では、田口鉱山から産出した鉱物のコーナーがあり、パイロクスマンガン石、バラ輝石、マンバンザクロ石などが展示されています。

（堀木真美子）

表1　田口鉱山のマンガン鉱石の産出量変化

	粗鉱	精鉱
昭和 24 年	2,150	1,416
昭和 25 年	835	475
昭和 26 年	615	565

（単位：t）

「本邦鉱業の趨勢」より作成

＊粗鉱（そこう）：採掘されたままの鉱石のこと。
＊精鉱（せいこう）：採掘された鉱石から不要部分を除いた鉱石。

図6　設楽町産出のバラ輝石

設楽発掘通信 No.81
令和5年8月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話 （0567）67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力 株式会社 二友組
あいち埋文